

児童健全育成賞（數納賞）

京都市明徳児童館「認知症理解への取組」 —高齢者福祉との協働・支え合う地域へ—

京都府京都市
京都市明徳児童館 館長 西 尾 久 美

I. はじめに

①法人の理念と高齢者福祉との連携

明徳児童館は、京都市左京区の岩倉地域に2010年に開館しました。放課後児童クラブ事業を一元的に実施しています。運営主体は高齢者福祉事業を主とする法人で、高齢者福祉施設と合築の児童館2館の運営に加え、小学校の敷地内に建てられた明徳児童館と錦林児童館を新たに運営することになりました。単独の児童館であっても、「(1) 児童を中心とする総合的な福祉活動の推進 (2) 異世代・異年齢交流を通じた子ども育成・子育て家庭支援・地域子ども育成環境の創出」という法人の児童館運営理念のもと、合築の2館の実践を基に、積極的に高齢者福祉との連携を図っています。共に支え合う地域をめざし、岩倉地域包括支援センターと連携し取り組んできた実践の中から、子どもを対象とした認知症理解への取組を報告します。

②地域の歴史と特色

岩倉地区には、後三条天皇の第三皇女が心の病に陥った時、岩倉の大雲寺境内にある不増不減の靈泉を毎日飲ませたところ、病気が治ったという伝説があり、各地から多数の精神障害者と家族が参集され、周辺では宿泊施設（旅籠・茶屋・保養所）が営まれるようになりました。古くから精神障害者を受け入れてきた歴史を受け継ぎ、精神科の病院が開設され、全国に先駆

けて開放医療に取組まれてきました。地域には「開放医療検討委員会」が組織され、病院スタッフと地域住民が議論と努力を重ね、ノーマライゼーションを実現してこられたのです。長年この土地に暮らしておられる方々は、医療・福祉への熱い思いと自負をもっておられるように感じます。

のどかな田園地帯が、時代の波で田畠が住宅に変わり、多くの若い世代が移り住んできて、放課後児童クラブ（以下児童クラブ）登録児童数が約140人、乳幼児クラブには120組の親子が登録されている、子沢山な地域となりました。地域団体で活躍されているシルバー世代の温かいまなざしがあり、児童館の開館直後から児童館・児童クラブ事業に地域団体・個人それぞれ多くの協力をいただきました。

③自分自身の経験と思い

1993年から14年間、少子高齢化著しい地域の児童館に勤務しました。少子化で利用児童が少ないことを生かし、障害のある児童を積極的に受け入れ、障害のある子どもも、ない子どもも共に過ごす中で育ち合う毎日を創ってきました。盲学校や視覚障害者施設が近く、日常的に視覚障害のある方と行き交う地域ですが、登録制の民舞クラブで「沖縄エイサー」を踊る際に、三線を弾かれる全盲の青年がお囃子を担当してくださいり、一緒に活動する機会にも恵まれました。大雪に見舞われた日、その青年が、雪で点

字ブロックが埋まり歩道と車道の境目も分からなくなり、交差点で立ち往生しておられ、それに気づいた6年生の○さんが、自分から声をかけ手引きをしたそうです。「『よかつたらお手伝いしましょうか?』って言うたら『お願ひします』って言わはったし、ライトハウスまで一緒に行ってきた。喜んでくれはったよ。」と嬉しそうに報告してくれました。障害のある方が児童館に関わってくださることで、おとなしい○さんの優しさと積極性が引き出されていると、感動した出来事でした。また近隣に高齢者福祉施設ができ、子ども達の表現活動がきっかけとなり交流する際には、子ども達が主体的に活動することを大切にしてきました。子ども達が事前に施設を見学し、職員さんの説明と助言を受け、交流を企画・準備しました。交流の度に、子ども達が生き生きと活動するのを受けとめてくださる高齢者の方々も、子ども達から刺激を受け、表情が変わっていかれることを経験しました。障害者や高齢者、多くの方々との関わりは、子どもたちの社会性を大きく育てることを実感していました。

明徳児童館に館長として着任し、新しい児童館を創る仕事を始めるとき、自身の経験から大切にしていきたいと考えてきたことが、法人の児童館運営理念として「児童福祉活動は、障害児(者)福祉や高齢者福祉との連携と協働を通して付加価値と相乗効果を生み出すことができます。その成果を地域における総合的な福祉活動の展開につなげます。」と明文化されていました。先輩館長にぐっと背中を押してもらっているように心強く感じ、館長の責務への不安がありながらも、期待をもって歩きはじめました。

④2010年 開館当初からの取組

岩倉地域包括支援センター(以下センター)を運営する法人は、児童館の運営主体とは別の法人ですが、開館当初から連携して取り組むことを模索してきました。センターと左京区介護予防推進センターが実施する在宅高齢者対象の「転倒予防体操」は、会場を転々として実施されていたため、児童館の児童クラブ専用室を

午前中に会場として活用してもらいました。そして転倒予防体操後に、高齢者と乳幼児親子が交流する15分間の「ふれあい体操」を行いました。単独の児童館に地域の高齢者が足を運ばれる機会となり、日常的な異世代交流が生まれました。夏休みには、小学生を対象に、「認知症サポーター養成講座」を実施しました。講座の後も、児童クラブのおやつや終わりの会などで、「地域で困っている高齢者の方を見かけなかつたか」「その時どう対応したか」ということを話題にしました。すると、子どもから「公園でお尻を出して座っているおじいさんがいたら、お母さんと交番に知らせに行った。」という話が出るなど、「認知症」を身近に感じている子どもが多数いました。2012年のある土曜日に校庭で遊んでいた子ども達が、迷い込んで来られた高齢者男性を心配し、自分たちから話しかけていきました。男性が大勢の子どもに驚き、校庭から出て行かれたため、その後は職員が対応しましたが、子ども達の行動を頼もしく感じました。その日の終わりの会で、最初に声をかけたT君とS君が「今日、俺たち頑張ったよな。」と、とても誇らしそうな表情をしていたことに胸が熱くなりました。この出来事が「子どもが地域社会で力を発揮し、自分が社会で『役立っている』『必要とされている』と感じて育つていってほしい。そのためには児童館に何ができるだろうか。」と思い巡らせていました。

II. 「認知症あんしんサポーター講座&地域探検(サポーター養成講座と搜索・声かけ訓練)」

①2011年 子どもを対象とした

搜索・声かけ訓練についての発想

2011年にセンターが実施された『『徘徊』模擬訓練』は、徘徊行動のある認知症高齢者が行方不明になったと想定し、地域を捜索し発見したら声かけを行うものです。自分が認知症についてもっと勉強しようと参加しました。実際に



経験して「こうやって行方不明者の情報をもつて地域を歩いて探し出すのは、子ども達にとっては、絵本『ウォーリーを探せ!』の実写版のように楽しい活動になる。」と思ったのです。もう一つは、認知症高齢者についてのテレビ番組で、行方不明になった高齢者が家屋と埠の間のわずかな隙間に入り込み亡くなっていたという事例を知ったことです。数十センチのわずかな空間ですが、数メートル向こうは生活道路で人が行き来し、道路から見えるところなのに、気付かれずに亡くなっていたのです。学童期の子どもたちは、『通やぶ』（「通学路破り」という意味と思われる）と言って、大人が通らないような通路を通りたがり、またそのような空間をよく知っています。「この方も、子どもたちが子どもの目線で搜索したら、すぐに気付いただろうに…」と思いました。子ども達が認知症について基本的なことを理解した上で、地域に繰り出し、徘徊して行方不明になった認知症高齢者の搜索に加わったら、搜索の戦力になると同時に、子どもが地域社会の一員として持てる力を発揮できると考えました。

②2014年度に実施するまでの検討と準備

「子ども達に認知症センター養成講座に加え、認知症高齢者の搜索・声かけ訓練をやりたい。」という発想をセンターに伝えました。センターとしても「高齢者福祉の視点からは、子ども達に認知症のことを知ってもらうだけでなく、いざれ医療・介護を担う人材育成という側面もある。高齢者や障害者に対して配慮し互いに支え合うという、ごく当たり前のことを、この活動を通じて感じてもらえれば。」との思い

をもってくださいました。子どもが認知症について知ることは、社会には様々な困難がありながら生活する人がいることを知る糸口になります。徘徊する人を探し、声をかけることは、具体的に『自分に何ができるか』を考え実践する機会となり、知識として学んだ上で実践することにより認知症への理解が深まります。

「ちょっと気をつけて見る、気がついたら行動する」という実践は、生活の中で意識をすれば、気負わずともできます。その実践が『ありがとう』と感謝され『社会に役立っている』と感じられれば子どもの自己肯定観の向上につながるでしょう。この活動を子ども達が「楽しい」「おもしろい」「またやりたい」と感じて取り組めるものにしたい…と思い、センターとも、職員間でも、次世代育成と地域福祉促進の視点を共有し、語り合い、企画をあたためました。2013年夏に小学生対象に「認知症センター養成講座」を実施した後、ある保護者が「娘が講座に参加し、祖母（認知症）を理解できるようになり関わり方が変わった。祖母の介護スタッフと娘が『児童館で会ったから』と顔見知りになっていて、道で出会った高齢者の方とも「児童館に来はる人や」と挨拶を交わしている。児童館で地域の方と関わりが持てていることを感謝している。」と話してくださいました。この言葉に背を押され、実施に向けた具体的な内容の検討に入りました。

③2014年6月「認知症あんしんセンター

講座&地域探検」実施

内容は、認知症について理解し声のかけ方を学ぶことと、搜索・声かけ訓練との二本立てになりますが、日程は日を分けるより一連の流れで実施する方がスムーズと考え、昼食をはさんでの一日プログラムとしました。搜索のため地域を歩くことは、子どもたちが自分の暮らす地域を知るチャンスなので、「高齢者にやさしい店」と「子ども110番の家」を確認する活動と、道に迷った認知症高齢者を探す活動を重ねました。認知症高齢者を搜索し声をかけるというこ

とは、今の社会状況においては、子どもが見ず知らずの大人に話しかけるという防犯上のリスクがあります。子どもは「発見したら大人に知らせる」ことを基本とし、「大人の見守りの上で声をかける」とこととしました。また安全確保のため、エリア内を自由に動くのではなく、動線は3コースに定め、児童館職員とセンター職員が各コースに分散して安全確認を行い、警察にもミニパトカーでの巡回を依頼しました。

次にスタッフです。子どもたちが小グループで地域を歩くには、数十名の児童の引率の他、交通安全のための要員、加えて認知症高齢者役、その家族（サポート）役など多数のスタッフが必要になります。児童館運営協力会の立ち上げに向け、各団体（自治連合会、学区社会福祉協議会、民生児童委員協議会、少年補導委員会、女性会、老人会、消防分団、放課後まなび教室他）に呼びかけて会議を開催した際に、この企画を提案しました。「児童館は遊びを通した健全育成の場。子どもたちが楽しんで学び経験する。」という企画の姿勢に対し「遊び半分で取り組む内容ではない。」との意見や「大勢の子どもをボランティアだけで引率して、子どもが事故に遭ったら…」という安全面での不安の声があがりました。基となる児童館の理念や企画のねらい、安全確保の体制など説明を重ね、企画への思いを伝えたところ、「高齢化社会に向け、社会全体で取り組まねばならないことを児童館がやろうとしている。」との声があがり、理解と賛同を得て協力いただけたこととなりました。

6月の小学校休日参観代休日に実施することになり、センターと分担して準備を進めました。運営協力会（地域団体）からのボランティアスタッフの集約や配置は児童館を中心に行いました。センターでは、同法人の事業所だけでなく、他法人の事業所にも協力依頼し、合わせて「高齢者にやさしい店」に子どもの受入協力を依頼するなど、高齢者福祉分野での協力を広げていかされました。

当日は梅雨のさなかの晴れ間、京都盆地らし

い蒸し暑い一日。子どもたちは午前中に「認知症センター養成講座」を受け、認知症高齢者への声かけの配慮を学びました。昼食は搜索訓練のグループに分かれ、地域ボランティアとアイスブレーキングを兼ねて卓を囲みました。午後は4～6人の異年齢混合グループに分かれ地図を持ち、地域に繰り出しました。地図の見方等、地域ボランティアに助言をもらいながらコースを歩き、「子ども110番の家」や「高齢者にやさしい店」を見つけては地図にシールを貼り、嬉々として地域を歩き回りました。認知症高齢者役を発見し、地域ボランティアに見守ってもらい声をかけたところで、家族役（サポート役）が現れます。家族役から「お母さん、どこ行ったかと思った、ここに居たん。あんたたちが見つけてくれたんやね、ありがとう！」と、お礼に飴をもらい、また次のコースへチャレンジ。山間のアップダウンの多い地域ですが、子どもたちは蒸し暑さをものとせず、早い歩調で進むので、大多数の年輩の地域ボランティアには過酷な引率となりました。

ふりかえりでは、地域ボランティアから「子どもたちが一生懸命に取り組む姿に胸を打たれた。」「あなたたちがいてくれたら、私たちは年老いても安心してこの岩倉で暮らしていける。」「子どもたちを頼もしく感じた。」などの感想が述べられました。子どもたちのふりかえりには「たんけんしてたのしかった。むぎわらぼうしですりっぱのひと（認知症役）を見つけられてくれしかった。（1年生）」「きょうはいろいろおせわになりました。またあつたら、なかよくしてください。（2年生）」「今日は二回目だけ（1回目2013年度は認知症センター養成講座のみ実施）前はこんなこと（搜索・声かけ訓練）してなかったので、楽しかったです。（3年生）」「ぼくは認知症の人にもし会ったら、今日のことを思い出して、助けてあげたいです。今日の学習で、助けてあげることが大事だということを学びました。（5年生）」など、認知症への理解、訓練の感想、引率してくださった地域の方への感謝が書かれていました。

④2014年11月 地域住民の搜索訓練に参加して

地域の搜索協力ネットワークに登録された方々の搜索訓練が、土曜日に開催されたので、児童クラブの子どもたちも訓練に参加しました。職員だけで引率するため全員が2列に並んでの移動でしたが、子どもたちは訓練用の模擬搜索協力依頼情報を受け取り、現実味が増したようで、モチベーションがぐんと上がりました。児童館で行った搜索訓練は認知症高齢者役の方が定点で待機していましたが、大人の訓練は徘徊されているのを探します。職員も子どもたちも、知恵を出し合い、スーパーの店内や迷い込みそうな駐車場や路地など、1時間以上も探しました。訓練なので店の営業の妨げになるなど迷惑がかりそうなところの搜索は、職員としてはさりげなく避けようとしていますが、子どもはそれに対し「何であそこ探さへんの。あそこで困つてはるかもしれない。見に行こう。」と言い、徘徊している方を心配し「探し出そう」という気持ちでいることがよく分かりました。最終的には運営スタッフの誘導で認知症高齢者役の方に出会い、声をかけて確認し終了しました。普段の館外活動なら15分も歩けば「しんどい」「電車乗りたい」と言い出す子どもたちが見つけ出すまで根気よく取り組みました。6月の学びと経験が、子どもたちの思いやりと意欲につながっていることを感じました。

⑤2015～2016年「岩倉の歴史」をエッセンスに加えて取り組む

子どもたちに認知症への理解や地域社会の一員としての意識が根付くには、継続して繰り返し経験することが必要です。どのような内容で実施するか。翌2015年の企画の際には、セン



ターからいくつかの提案がありました。ひとつは「子どもたちの歩調について歩くのは、大多数の年配の地域ボランティアには体力的に厳しかった。学生ボランティアの引率にしてはどうか。」との提案でした。学生団体とも関わりはありますが、児童館としては、地域住民と関わる機会を大切にしたいと考えました。地域に暮らす人たちが、我が子、我が孫だけでなく、地域の子どもたちを「愛おしい」と感じて見守ってくださり、子どもたちが地域の人々に愛されて育ったと実感し、自分たちが「地域の方々を支えていこう」と思うようになってほしいからです。このようにセンターと意見を交わし、継続できる形へと改善策を練りました。

まず、一日から半日プログラムに再編し地域ボランティアの負担を軽減しました。認知症サポートー養成講座の内容は簡略化しなければなりませんが、そこは妥協して時間短縮し、搜索訓練の動線を整理して移動のロスを減らしました。また地域の歴史を知る活動を加え、地域名「岩倉」のいわれの場所を搜索コースに設定しました。搜索コースの歴史探検レクチャーはセンターの法人の歴史好きの看護士にお願いしました。2014年から「岩倉地域ケア会議」に「認知症部会」ができました。センターは部会に働きかけて協力者を募り、開設したグループホームをチェックポイントにしていたなど、新たな協力の輪を広げていかれました。子どもたちは前年の経験で要領が解っている子どもも多く、スムーズに実施できました。ボランティアスタッフは引き続き児童館運営協力会を構成する団体からの働きかけで、普段児童館に来られたことのない方も参加してくださいました。老人会からは杖をついておられる方も参加してくださいり、引率していただいたグループの子どもたちは行きつ戻りつ、引率者を気遣いながら行動していました。前年も参加された方からは「去年は一日やったから、子どもたちといろいろ話せて交流できてよかったです。今年は半日やつたから、子どもたちとあんまり仲良くなれなかつた。」との感想をいただき、子どもたちと歩き

回ることも苦にせず、楽しんでおられたことがわかりました。岩倉地域の高齢者は、兼業農家の方が多く、働きに出ながら休日には農作業をするという厳しい労働をしてこられた方々で、年老いても、杖を使っておられても、お達者だということわかりました。



ふりかえりでは、「地域の中で子ども達ができる役割として、困っている人に声かけをし、そのことによって認知症の人々を早期に発見し、問題を未然に防ぎ、安心できる地域になることが実感でき、貴重な体験ができた。」「幼いからこそ偏見などをもたず純粋な気持ちで参加することができると思います。岩倉地域に限らず他の様々な地域でも実施するべきだと感じました。」と、地域の方々が取組の意義を感じてくださっていることがわかりました。また「岩倉のことを改めて知った。」と歴史探検も好評でした。子どもからは「とてもたのしい一日になりました。子ども 110 番をみつけると、ちいきの人があたまをなでてくれたり、かしこいねっていつてくれたから、ちいきのかたはずっとながいきしてほしいです。(1年生)」「にんちしようで、今までの楽しいおもいでとか、かぞくのこととかわすれちゃっていやですね。にんちしようの人がいたら、どうやって話したらいいかわかりました。(2年生)」「今日、認知症の勉強で町の探検をしました。そして認知症は脳の病気だと分かりました。私は認知症の人も住みやすい町にしたいです。(4年生)」との感想が書かれしており、地域の方々と交流し、認知症について理解を深め、自分たちにできる支援を経験し、どんな町にしたいかを考えていきました。

2016 年、次の課題は、高学年は 2013 年の認

知症サポーター養成講座から経験を積んでおり、1 年生との発達と経験の差は大きく、1 年生に解り高学年にも手応えのあるプログラムを開設しなければならないことです。そこで、4 年生以上は大人の比率はつかず、子どもだけで行動できるよう、安全面に配慮して搜索のコースを設定しました。この地域で精神障害者の保養所ができ共に暮らすきっかけとなったと言われる井戸(靈泉)や、地名の由来となった神社をめぐり、特別養護老人ホームを折り返し点にしました。また高学年向きに、認知症高齢者役の方が定点で待っているのではなく、コースを行ったり来たり徘徊しているのを探し出すように、搜索の難易度を上げました。一方、2015 年度から小学校の授業で 5 年生に「認知症サポーター養成講座」が実施されるようになったため、児童館での講座は低学年の子どもが理解できることを中心において必要なことだけに絞った「認知症ミニ講座」としました。地域探検のオリエンテーションは前年と同様、歴史好きの看護士さんにお願いし、分かりやすいパワーポイントとゆかいなおしゃべりで、子どもたちのやる気を引き出させていただきました。低学年の子どもたちは、地域ボランティアとの会話を楽しみながら、高学年は自分たちで地図を頼りに、地域探検と搜索訓練に取り組みました。地域ボランティアの協力も定着し、小学校 P T A や学童クラブ保護者会から保護者の協力も増え、親子での参加が増えました。

⑥2017 年「認知症理解」から「『老い』の理解」へ

積み重ねてきた「認知症理解と搜索・声かけ訓練」という活動を、継続したいと考えるもの、安全で子どもたちが関心と意欲をもてるような新たな搜索のコースが見いだせず、思案していたところ、センター長から提案がありました。「認知症は『老い』の中の一つの現象。認知症を含めた『老い』を広く捉えて、高齢者体験に取り組んでみては。」との提案で、「高齢者子どもサポーター講座」として「車いす体験」「薬の仕分け体験」「高齢者疑似体験」「認知症ミニ講座」の 4 コーナーを開設することになりました。

認知症理解への取組 参加者数

年度	参加児童数			協力ボランティア数			合計	備 考
	低学年	高学年	小計	保護者	地域団体	小計		
2013	43	1	44		4	4	48	講座のみ
2014	53	5	58	1	26	27	85	講座+検索・声かけ訓練
2015	43	6	49	1	25	26	75	講座+検索・声かけ訓練
2016	56	14	70	4	21	25	95	講座+検索・声かけ訓練
2017	77	17	94	10	10	20	114	講座+高齢者体験

た。スタッフについては子育て世代である放課後児童クラブ保護者会、小学校PTAの協力人数が増え、親子での参加も増えました。多世代が交流し、子育て世代への啓発の機会にもなり、内容に加えて関わる人の輪も広がりました。

参加した子どもたちの反応は、車いす体験はどちらかというと車いすを扱う楽しさの方が大きかったようですが、高齢者疑似体験では、目が見えず、膝が曲がらず、体が思うように動かないもどかしさを体験して、老いの辛さを感じられたようです。認知症についても、特に高学年は何度も繰り返し学んできたことで、思いやりが深まっているように感じ、年に一度の取組でも積み重ねの大切さを感じました。参加した保護者や職員とは「体験を通して、他者の状況や気持ちを想像する力をつけ、他者を理解する力をもってほしい。」と話し合っています。

III. おわりに

①子どもたちへの取組の今後

児童館の子どもたちが、実際に検索に加わる機会はまだありませんが、明徳児童館が検索協力ネットワークに登録し、行方不明者検索の情報があれば、児童クラブの終わりの会などで子どもたちに知らせています。翌日子どもから、「昨日の人、見つかった？」と尋ねてくれ、「帰り道、気をつけて見てたで。」「お母さんにも言ったよ。」「スーパー行った時に居はらへんか探したで。」と気にかけてくれています。子どもたちが地域社会で持てる力を發揮し、地域住民

の一員として主体的に生活するきっかけとなるよう、継続して取り組みたいと考えています。今後は、続けて参加し経験を重ねた高学年が企画・運営に関わるなど、子ども達の、より主体的な活動となるよう、改善と工夫を重ねていきたいと思います。

②対象は「子ども」から「子育て世代」へ

センターは、岩倉地域において数多く認知症センター養成講座を実施されており、受講者の年齢層は子どもと中高年層に増えています。しかし近い将来、親の介護に直面する20~30代の子育て世代の受講が伸び悩んでいます。子どもたちへの取組は定着し、子どもたちが認知症について学べば、家庭で話題になり保護者への啓発にもつながりますが、間接的でした。センターの提案で、子育て世代に直接啓発する機会として、2016年から運営協力会主催で行う地域交流行事「明徳児童館まつり」で、認知症ミニ講座と声かけ訓練を実施しています。スタッフについても、子どもたちへの取組の実績がありスムーズに協力が得られ、2017年度は小学校PTAにお願いし、保護者7人が協力してく



ださいました。子育て世代から、子どもと子育て世代への発信となり、高齢者福祉と児童福祉が力を合わせて地域課題に取り組んできた成果と広がりを感じているところです。

③多様なあり方を認め合い、支え合う地域社会へ

「認知症の理解と支援」というテーマに子どもたちが取り組むことで、子どもを中心に幅広い世代の関わりが生まれました。開館から7年半をふりかえり整理する中で、自分の地域福祉促進活動のイメージが変化してきたことに気付きました。「地域社会がより暮らしやすい社会になるよう、子どもと子育て家庭が地域社会の課題に取組むことは、子どもの社会性を高め自立を促進する。」という、子どもや子育て世代が積極的に地域社会に関わっていくような、子ども主体のイメージが強くなりました。以前は、地域住民に子どもが守られ育てられるという、どちらかというと子どもが受身でいるイメージの方が強かったです。

内閣府の平成26年度版子ども若者白書「特集 今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～」では「社会問題への関与や自身の社会参加について、日本の若者の意識は諸外国と比べて相対的に低い」という結果だったことが心に残っています。地域社会の身近な課題に対し、子どもたちが「楽しい」「おもしろい」と積極的に取り組めるような『しあわせ』(活動)を考え、実践し、子どもが「自分たちの力で社会を変えていける」と感じて育っていってほしいと願っています。子どもを真ん中に、他の福祉分野と協働し、地域住民と力を合わせ、精神障害者と共に暮らす岩倉地域の長い歴史の中で培われたノーマライゼーションの理念を、子どもたちがしっかりと受け継ぎ、生き生きと暮らしていくよう、これからも、そんな『しあわせ』を展開していきたいと思います。